茶乃湯古今或問　上

495

夫昭々として高明なるもの天地の運なり
其理や廣く厚ふしてしかも無尽蔵なり
人其中に生じて萬物の霊たり七情はよ
感じて餘情きハまりなし和漢風俗
中比より茶湯を翫び又徒に翫好
之事とするよりつひに五性にもとづかね
ごとく端を擴るのミ故に茶道ハきはま
處なし今編る所の古今或問

ハ茶湯此來由古人の嘉名師の辯
論を詳よ書あらぬ此巻を繙けハ
其遠きハ往古より溯り淵源を究め
近くハ睫毛の靈理を曉して雲霧
を開く日月をみるがごとし豈不益
の至寶といはざらんや于時元祿五
壬申歲中秋下旬廣長軒序

茶之湯古今或問

洛陽隱士遠藤元閑新編

茶此湯之古事

一或問茶之湯ハいづれの比より初る分て其道を
貴ハいかなる事ぞ予答唐より日本へ
渡る事ハ亀山院文永之比也

初祖 達磨 二祖 惠可 三祖 僧璨 四祖
道信 五祖 弘忍 六祖 惠能 南岳 馬祖
百丈 黄檗 臨濟 興化 南院 風穴 首山
汾陽 慈明 楊岐 白雲 五祖 法演 圓悟
虎丘 曇華 咸傑 松源 運菴

大宋国径山寺虚堂智愚和尚是ニテ
日本国筑州崇福寺ノ開山南浦紹明和尚
勅諡圓通大應国師ト云 正元ノ間航海至ル
大宋ニ径山寺ニ嗣法ヲ虚堂和尚ニ而帰朝ハ
文永四年也 亀山院ノ年号 北条時宗執権ノ時ニ當ル 在大宋国ニ
十年帰朝ノ時筑前ノ興徳寺ニ入寺ス文永七
年秋移ル大宰府ノ崇福寺ニ居住三十年嘉元
甲辰年奉詔京師ニ住持ス一万寿寺ニ 亀山院文永九年創ス
徳治丁未年奉旨鎌倉巨福山建長寺ニ入寺ス
延慶元十二月廿九日ニ示寂七十四歳
一 洛陽西京敕建寺ヲ瑞鳳山龍翔寺ト云今

紫野ニ龍宝山大徳寺ニ移ス開山宗峯妙
超和尚 花園院後醍醐天皇ノ御帰敬
右南浦紹明和尚入唐ノ時径山寺より臺子
を一荘飾り帰朝して崇福寺ニ数年ありて後
京師北紫野大徳寺に渡るニ後ち尊氏将軍ノ時
天龍寺ノ開山夢窓国師右此臺子を用ひ茶の
湯を始め給ふそれより武家へ出たる
一 或問日本にて茶の湯始るよりこのかた宗匠は
誰々と云ぞ 予答 或書ニ 鹿苑院殿義満
勝光院殿義持 慈照院殿義政 能阿弥相伝
道貞 宗訊 志野 後光 紹鴎 利休 織部

州トなる予が聞及たるハ夢窓国師等持院
なる民部卿 宝篋院殿義詮 鹿苑院殿 慈照院
殿別而此代茶湯発向ス是を東山殿と云能阿
弥 立阿弥 宗珠 珠光 引拙 紹鴎 千宗易
利休居士 古田織部殿 小堀遠州殿なとハ宗
匠也其外ミな名ある人ハ何れも此宗匠と八雅観
一或問茶ト云文字ハいつれの世より始る 予答本草
之表ハ久しきもの也 昔茗ト訓ス其後茶ト云本草此
表ハ如何する書ニ塵芥抄と云書ニ見る天竺国
耆婆大臣一人の娘を持此娘へ用事有て住そ於
よかれし娘姫媛ニ死ス耆婆本国へ帰て娘此事

を問死たる事を大ニおどろきかなしむ其墓常
有合ど療治せざる事を悔ひかれ娘の墓へ
来てせんりけし也其次の年娘ノ墓ニ何となく
未見たり其木の葉を取て味ふニ気味よろしく其
木を煎し用る又摘て飲む也娘此年死た
る時成也其故ニ其比人の木と書て茶ト讀
至郷也又州人ホト書する事也
一或問一切食物此中ニ茶を第一とするハ如何
なるところぞ 予答能ふ審せ五臓ニハ五味の
食物有心ニハ苦が食物肺ニハ辛が食物肝ニハ
酸が食物脾ニハ甘が食物腎ニハ鹹が食

如此くの食物を料理にすれし深きかゝき
も不ちやき物ハ使へ尤苦（ニガ）きものとはりふすかし故
食なニハ心はまてゝよくなる也茶味苦し心食物
也其故ニ食後よ濃（コイ）茶を飲（ノム）と云ハ式礼（レイ）也又貴（キ）
人（ニン）ある位ハ人ニも薄茶を上ると云ハ心ハ膳をあし
ぬずる心也

一或問宇治ハ茶濃（コイ）茶薄（ウス）茶の分（ハケ）ハ如何（イカン）ニ答
極（ゴク）上と云ハ濃（コイ）茶別儀（ヘチキ）と云ハ薄（ウス）茶也極上の内か
ら釣（ツリ）出るを極釣（ゴリツクリ）と云別儀の内より釣出るを
別儀釣（ツクリ）と云其次を上釣と云

一或問濃（コイ）茶を極（ゴリ）上と云ハなど也薄茶を別儀と云ハ
子細ありや答珠光ハ摂州（セツシウ）花（クハ）ノ青（セイ）香（カウ）ニ茶諸游
しよ其壷（ツホ）にのまりて揃すぎく茶ひろくによりて頓密（ダンミツ）
お宇治へ申をしむしとそつとさせし也是より
珠光ハ別儀ニ名作（ル）下さて薄茶ハ上を別儀と云

一或問宇治ハ極（ゴク）上を半一（ハンヒトツ）と云心如何答極上を
一ハ茶目弐百目也其を十に割て其内を其袋（タイ）
云然ハ茶目弐拾め也其を袋（タイ）を二つにする故半
一と云也袋（フクロ）をまよする故也

一或問四季を半ノ茶ハ何（イツ）れ比より初るぞ答昔
尽くまれなりしハ東山殿義政将軍之時初る是
まとひの茶をなして中ハまゑ[illegible]ハ中（ナカ）ニ

六寸の炉外角にして中を丸くゆる天井の
中に天ぼぎを付自在をかけて茶の湯をせし故
しかる名目と東山銀閣ニ昔の侘数寄
向に書院座三尺の床ちがひ棚を付たる押也
紹鴎の時迄ハ四寸炉也利休の時分中
の寸無の角へ寄炉をさしはすニし居無
六尺寺すり多きを今の世に用る也
一或問数寄屋と云圍と云ハ何の故也いづれニ
訳なし宮や又ちがひあり亭数寄屋と云ハ
屋敷の内に分をさだめて建物を敷
寄屋の次に建つゞを云圍と云ハ家につゞけて縁

のゑや又ハ茶がたの脇をかこひて茶點所を付
たるとしひとを云
一或問長板と云ハ何の比に始るぞ亭答曰長板
ハ千宗易利休居士之作れる処也先利休を中
古宗匠と云一忌紹鴎の時まて八家茶の湯
上人のとそ好ひ物なりて下の者の丸扱ニ
とかし利休侘をたをけの為ニ真手の天井
の板を取てのなれとのけ風炉釜をまうけそ
の外真手の錺を用て茶の湯を好むもよ
うに出来ぬ也又ハ出来まる也
一或問風炉ハ何の比より出来るぞ亭答風炉

利休の作く長板ニ尺八寸数故長板の下板
端ニ切大板と云是に風炉斗をのけ水指と
置合茶の湯を初し後大板を小板ニ直す
と此小板是也風炉の大焼ニ切くお土器を
垂灰とする事灰に居る事と此土器ニ風炉
是なり

一或問中柱ハ何の為に仍るぞ　予答利休風炉を直
す時たよりを有まる事をもてして直す
悪き多きとて居る其ニ尺寸あらハこそ
先ニ台子を抜きてのめける其間ニして一尺五
寸ニ歩也丈だけハ人七寸三歩ニして先をとり

つけおらハ此くべを付て台子の三本の柱ハ何る
心也と云本や違する事付中柱をたてたるお
ちくと台子を荘まる物也

一或問何れ柱ハ下をつける寸法あくまかにかり
て台子の九寸あまり又ハ弐尺も有此寸法ハ弐尺八寸
まてある子細ハ如何定法有や否や　予答云
くよ寸法かかる八根かを知ぬ故也人此振た
形なる見世へ寸法定まるなしニアが寸法
八根か台子の居よりまたるたけ弐尺弐寸之
台子をもしたる物故外の寸法ハ見るまる物
也台子をハかん作ある一し

一或問炉よハ何れ比ゟあるとゝるぞ　答曰
半ト云ふ和也赤在と建(タテ)風炉ニ而利休茶の湯せし
故ゟ夫冬ニ成(カエ)ニ至てかひ炉にて釜を仕あて
よりしも上侘(バヒ)人の茶の湯をするにと廣(ヒロ)く
あるよ云へ方の法度とられ是故へハ客居の
たゝまりハ居(イ)ミへと先と一尺五寸八歩ノ(トコロ)ニ炉
と下へ切入をしきを如く太客居の真ニも是て居
たゝすける故也是半とニ云名出る所ニ
して客居の向ニ躪(ニジリ)上りと付るる客ニ
人をよひとりて食おいたく汁(シル)鰯(イハシ)とするき
向よ付て侘(バビ)とらめこれを世ニ凡習茶向する也

一或問炉と所の寸一尺四寸と定事ハ天下一ニ至
釜大なる不審(フシン)釜の大なる時ハ炉も土段(ドタン)て太く
とられ又小なる釜の為ニハ脇すきて悪シ
然ハ大なる釜ニハ一尺五寸ニても六寸よても又小なる釜ニ
ハ炉と小くすべき事なるニ釜の大小ニかゝわ
らぬと是尺四寸の定法の拠(キョリ)たるハいか様なる事そ
答能(キ)不審せり是ゟくニ釜の大小ニ
当事すくニ古(イニシヘ)東山殿の炉ゟとも外紹鴎ノ
時まて八是尺五寸ニも六寸ニも仕る事之利休より
定法の定(サダメ)ニと云ハ菓子の下の板或尺八寸長サ一
尺四寸をくせ此板を或ニ切たる処の此かたまる也

も故寸柱しきを尺五寸へ歩ニ建(タツ)ルせ然ハ定法是(モ)ノ
一或問角棚ニ釣事にいとれるや又下棚(タナ)と小ニ
して上棚と大ニするハ不審せ甚して物ゟ(ラ)と親ハ
下と大ニ上と小ニするが通法之数寄屋ハ角なる
と下と小上と大とするいかなる事答棚と二
重ニしむすハ下たるにるた放事(コト)ハ淤(ナル)事迄たも
上ハたるニハ上る道具ハ口傳下棚と小ニして上
たるを大ニするとき(ヨキ)ハ大なる故口傳
一或問三重ハ大ハ出来(デキ)る物ハ何ハ比分ぞ答古
田織部の作せ一重ハ中ハ何まるせバき故中柱
ハ外と六尺の内て前ハ寸柱の外へ炉と出(イダ)ス

心ハ円ニるハ炭しこへふくく円もつまる故外へ出ス之
も故前ハ八九ハせにるてめハ六尺よハ不足ニ二尺
よハのびたる故大目(メ)と云もによりてにるて大目こ
云と目ハ字と略(リヤク)するなり
一或問炉ハ角と四方ニ切(キル)事何ハ比ゟ始るぞ答
宗易利休之作せきそ尺四寸に炉と甚し中ハ丸き
ハと四方ニ寸ハ土(ド)壇(タン)ニして夏(ナツ)ハ古ゟ(イニシヘ)丸き
炉ハなきなる事と恐(ヨリ)く灰(ハイ)ニる四方と切せ
一或問袋(フクロ)棚(タナ)ハ何ハ比より出来たるぞ答古甚
子と本よしてなく作る也円ニ紹鴎(セウヨウ)の
時よりもの中棚と香棚(カウダナ)と云紹鴎ニ有り

ゑかうなど八大黒と唐と日本にてハ倉梅にハ秘事へ
一或問ゑ物とかゝる事ハ何の世よりか秘する事ぞ 予答
唐(モロコシ)も安(アン)の瀧(タキ)よりぞ文字の流(ナガレ)おちたるとしるく
墨(タツ)物の内の文擬(ヨ)物と床(トコ)にかけると云事出来(デキ)る也
一或問茶の湯にハ墨(ボク)跡(セキ)をかけく偈をうけ
たるハいかなる事ぞ 予答 墨跡の出処禅家(セニケ)
よりましく世にひろまる故也 一ニ禅家を貴ぶ故
也分(ハケ)く虚(キ)堂(トウ)の墨(ボク)跡(セキ)を貴ハ紹(セウ)明(ミヤウ)和尚の
虚(キ)堂(トウ)ハ師(シ)匠(セウ)たる故也
一或問四幅(フク)一對(ツイ)三幅一對と云事ハ何の書(ヒョウ)事(ジ)ぞ 予
答 唐にて畫(リウ)して琴(キン)碁(キ)書(ショ)畫(クワ)とこけ

たるよりまで和しゅう也 其よ類(ルイ)して三幅(フク)一對(ツイ)二幅
一對と云 言(コト)葉(バ)出たり 當(トウ)用(ヨウ)ハ五幅一對よりまで二幅
一對と云までを
一或問春日(カスガ)卓(ジョク)と云ハたかき物にて世に秘蔵(ヒソウ)す
の何故ぞ 予答 春日卓を世に調法(テウホウ)にする八其子細
ある也 春日大明神の御詫の御膳(セン)の下の臺(ダイ)を卓
と云をサ一はめくによかる頼ありを求(モトメ)た
れ人ハ春日卓にて秘蔵する也 其故に在ぎき
物なれと唐(モロコシ)よりも多く渡るをと卓(タク)卜訓膳の
臺なるを中央(ヨウ)の卓卜云也 文房なる椽(ヨリ)けにまする
をなり八足三足の卓のなり物ばよよきさする物也

又長(ナガ)早ニ皆(カイ)入(ニュ)墨ぬるハ文ハたけひきてよ出事
見ゆるハ唐ゐと唐よ荘(カザ)るとみえたるハ
一或問床ニ花を生る事細成や答曰大せつよ
春の始ニハ必槌(ツチ)を盆(ホン)ニ宗(セ)得(エ)方(ホウ)ニ向く天地久
ニ槌を打初るなし付ける時大ニ槌打給ふ下よ
虫(ムシ)けるまじきもしめさきをおこほし給ふ大ニたニ
おどろきおこるを支をらひたる槌(ツチ)を立よしてたるニ
花を結付かれむしを弔(トムラ)ひ給ふたるなる床よ
花を生ると云文が初る口伝
一或問薄(ウス)板を敷く事ハ如何答曰延(エン)喜(ギ)聖(セイ)帝(テイ)の
春の花の人くらふ花御流の始ハたきもさ給ふ也

床ならる花を挿行まて久しくバたち枝々かなり
立にさけりるを人くそれとするハなかりぎねたね
袖をかさねでたきを奥(キヤウ)せる勢給ひたりかぎねヲ
下ニ是花を上ておもく垂給ふを世人見なるひ
花の下ニハうと枝をなせ
一或問茶入ハ何の故に有事答曰遠き昔ハ池(アラ)を
入たる物也中の唐(モロコシ)より唐(トウ)人来く焼(ヤキ)物を初む給
唐の土をこれまて肩(カタ)衝(ツキ)六拾六焼(ヤキ)て日本ニ六十六
ケ国へおくり給ふ其後唐物の名物(メイブツ)よ
なしとハよくなくなくて天下名物其の外のよる
ハ肩衝の文也茶入て大なる物也右の唐人の上意

飯とぬめゑて目なれぬ何也れ不二土何とや
答し美濃は瀬戸と云不は土を得
出し焼もを古瀬戸と云是も名
紀よへ也を後瀬戸にして古は茶入を焼也
一或問天目ハ何を他とやんいふ答天目と
建盞とへ上とするものは外よりも多く建盞也
ところハ昔時宋に於て慈寿と鄭継山流
されし時大生何と也こ是普門品の二句解
とちゞけ身やとをら写しと其葉に書付
て其もとて流て元見は末と有るもの
門下は土を取て焼たると建盞と云又縁山也

云者は古事由へ天目に用ゆく八毒と去故に依て
天目は其也云々
一或問茶碗ハ何を能云や何れ陶の物を納るもて答
唐にる八茶碗ハ金陶此器よする日本にる八茶碗
を茶器に用る紫野大徳寺へ五器を茶碗後
鉢是を茶碗也値一とス手向よとこらよの丘
器と云が者しる蘂よ物を盛る内は井戸手
ことい伊羅保女数能也其外なる蘂分能之
よ盛る又問剥く刷なる高台を秘蔵するハ
何故そ答刷なる高台八十よ其何元一つ宝子
細八十元一つ宝にするもち宝上する上ノ茶碗

は訓る甚也くる時なるをいごかせ乃茶なに
剣なるを故世秘蔵するハ書にゆへ心なり
一或問茶酌ハ何を上とするぞ答　茶杓ハ古へそ
うげしする　節ある時よりを行にある又問節
の茶酌ハ節なしにしてとの世之抜茶酌なり
ハもし是ゆ何答を也古の茶入又ハ名物ハ長ケ
なるく大なるにより故に茶酌も長し節の付様
又ハ自然の曲によしけるを行よ故節なし
一利休の時分中に節を付茶入も小さくなりし故
茶酌も短くなる也其後宗甫の作色々有寸法
を行よ寄故定て定まらなし　物数寄次第也

一或問頭切と云ハ唐よりを来る日本にある物ハ何
答古野金林なるに後醍醐天皇の勅作に至
たると云遣せ以切の成ハ胴ハ一文字にして蓋あれ
をなさしてなよるなるハ蓋がき合たれども出た
れ物之本ハ蓋てんの根なるよし又一説に五葉松
とすると云支なき
一或問棗ハ何を上とするや　答　古ハ棗を用た
なとと云支惟に如何と茶器と云を用たるなり
是ハ唐物に多くあるなり中奥ハ利休の作の棗を
黄成する利休棗よりハ底に判あるも外よりハ薄
のあるを用ゆ

一或問茶入に成ㇾ内文琳と云成ハ世人黄[illegible]ぞ
を肩衝の次にあてゝせ文琳と云名ハ如何なる心ぞ
付て予答昔文琳老师と云人川を渡つて菓一ツ
ひろひ持帰りて見れバ藥なりし細末して人に
あたへ諸病たちまちに平愈ス其菓ハ故今
の茶入に形似たる故ひろひたる人の名を以文琳と
云菓は出生ハ不知故也

一或問芋の子桶鉢瓶水指ハ何色の比より出来て予
答芋の子桶ハ紹鷗の時より出来るほど化に
桶たるも鉢瓶水指ハ古田織部正作也寸法
ハ三傳集にしるしたりあまた有り口傳をもて秘侍

にかるし桶なとゝ云何なり

一或問露地の内に柴垣を二本立て楗を建小さ
き戸にて後先に出入を出したる戸をはる戸と云
は心如何予答是二説ありはる戸にて何ミに楗を二
本建て是を末と頭とを定ず切て左右を一文字に
切るはる頭にのぞりけり是を猿戸と云説あり又一説
ハ奥山なる猿など入りて嵩くなるを取て人集
来付ハ此に出き人を留るを心と云ふさるる戸に成と
説先ニ行を出しける此行のを嵩ある形を表する
は心に観なる理ニ叶ふべし説善しと故ニはる戸にて
ちるおよ口傳なり

一或問石燈籠に大といふ事ある又ハ何れの比より始るぞ
予答鹿苑院殿御庭におゐていろ〳〵多く有
一居のもとに立石の上へ至るすゝとあつらし侍る始りとき
にて居て重ふ侍るを以て合點ゆかぬハ通ひなる事
数不知に後まりたる事也　桐よ不審に居
と石の下と沼んを付之ハ高る果たる死り
いとすぐと立並ふを所まとと居る名
まにちまとすうし常に燈明ととぼし御帰紀
がし石燈籠の始也中比も重則利休が
とよび出し黎ふる藪がきの時より始めし
かりし

一亭主振　四月行見ニ並
或問云傳集にいふ主方一通教外
に一段上の習あるや予曰如斯之ニ
の口傳有一書を以答へ
一史記ニ曰舜崩於蒼梧之野帝の二妃よ
娥皇女英かなしみなたへ涙をかけし所よ
竹にかゝりてまるると此葉竹
是也故に茶之湯の此遺在文ハ恩し
熱して茶之湯ハ不絶縁うるゝとまる敬
あると世に多く葉竹を敬為心得紀すへ
一二役竹ハ竹の根ニ七分籠に後と云統きたる在

大毒となる事よ遠支きらふ也

一法躰ハ八徒と云物を忌也ひとへおもし是ハくれ

おずきを御手紬ハ付風紬よして通し名り也

すそれ服北方を不入やうを明乾之

一八徒ハ上よハ赤帯をするおる微ひまを此類是

此如く偽先とおよ新ぬけるる之

一十徒とる茶を點る时ハ黄なる巾る腰ふるる也下

法ハおほけたるが善し

一小遠云伏尼北圍ニ中柱をまけを書柱之下柵

と上柵北篭ニ大成るめぐべきようしるを云仁お

師匠あつかへば此心を理ニ叶り又さなり

小遠云此おほ数寄なる上下此柵多しよ下柵此不

よろしく八寸此板と二文字よ釣ありて文を理ニ叶

一顯向此石と云物あり是ハ侍合此向中なる是此死

遠よあまる石也やうつくと云子細ハてへを此おまるむ

くひよ出る时互よ出る場故よ云

一御成此御茶此時此器ハ茶此時まきとけて存

く新あ物上下と新あときく出るが式正なり

一云家元へハすべて臺天目也濃茶點るニ一ツ入

しきニ服點也子細ハ高位方ハ大茶ニあるまじく

しを故客服也加賀中納言殿へ江府より八条

之宮様御扣請之時古田法也先師付

此臺子おゝと近勤たる人也爲茶を臺天目
也を點極ハ其此臺子此かくと云點る也
一 云方極へ紹鷗御茶上し时義弘卿此御撰物
を作らんツ重ニ遊ス御茶ゟそ御撰物候乃
仕合由中上數挽心きざくと思召御らせ遊ス
紹鷗後ら戴拝見しき侍此志中ニ家
れ氣此付る作とらく时此人へほめし也
一 其上よ夕拿るしい先ニ座よ進物とを後花ニ生
此利休織部より口傳よ心へたり小遠州ハ猶ハ花入
を花とうけ中立よ花を生る夕ハ花入を置
中立よ至りぬとかくる也

一 紗の花とうけおゝ爐かざる事をきよしあゝ
うけて文字しけるも口あつひとしてかざるはし
けるも壷と袋へ入かうし荘る事しけるも壷此下
よ八必小姉んよるさを入落也早ちおよ壷を宗
よるを示ぞする事けりて令孟口しる此絡を
とき上此おつひと成る客へんする事也
一 釣香爐の此不よりけ向よ予ねをかるはす
けるを掛中立の时花ぐらり出るはし 又予ねを
しよ釣香炉ぐらり卸めようけ仔予ねと下ニ
一 花生一つよ毛を支る
一 鷹ひけめらく分ぎ此らね也と書きある座此紙

縦の方よ持てたてかけ置　秋毫の尾申ヵ様よ
する時ハ是を少しはなし笄おそ
く置ハかゝる事之花生る事　又かけ笄おそ
お客へ不見しあまりへかけさせる事有
一　お船門出の茶の湯よひしくうけしむけ置こ
そ不吉也故ハ此事をとあとを見ぬくれずき候
水指物を同ま
一　有人の曰膳の内よりて据上りて楊枝ぐふ
進し菓子の絵讃とうけ取と親
一　床よかけ物とかけ下よ盆山をかざる事有
む盆山ハ盆よのせる白石砂を盛て一面ふ

十八ゞ盆山よ盆一りたる事の東山殿
の御秘蔵の名残雪と申ハ七二の石を龍寺門
まいるよし也廿七寸と分るサ三寸に盛る
有るに伝ふ石の寸法の秘事也
一　然して茶の湯者ハ一事は事をなし能事をつかう
東山殿より此方小遠州まで皆一事は達人
千宗易ニ古織と云の一事はすて又盆天大坂の夏に行
桐ヵ盆ハ茶の湯の時搭進ら進み行る犯事ニ
未明よりこれらくお茶の湯のたぬしく様にかゝる也
一　茶の湯者ハ心持ていき意ハ二ヶ持之能雪に若俣
の月とゞある

月よ梅もみぢよいろよ老をそく人よ寄るとも(おとさ)申さ名代
名物の品并よ鼻(キヤク)丸河の宮財并あの心持一様
ひと作物常よ申すへし

一 或人の云
茶の湯者ハ古銘(コメイ)の品を見学へよ色すべて一代の品を見分
茶の湯者ハ普請(フシン)の品ともろよ一々見るとその人の品の分り
聖賢(セイケン)の品めし次よ茶の由緒愛敬(アイケウ)の品となまする事
世の人の茶の湯ハなれ者くもと見よハ人の常をとおした
茶の湯者ハ廣(ヒロ)くまなべよ世の中ハ目功聞功(ゴウ)良功訓(ナレ)功
一 金物焼(ヤキ)物の類(ルイ)よまの事よの付たるよハ水よつけ事
経金中へハ水に付也ことを行ひ物にハ生経

おつるめう物しかくきぬハ色よくいろくおとし候ハ
何事ごとも外ハころよし
一 夜会の時短檠(タンケイ)の置処座の縁名石の方向立
メ膝(ハギ)七メニ置せ角へ向ふ殿膝を置しつの者く来大目
無く水指の通かの無く置所りきハ二メくばし置
炉の方へ火先(サキ)と向(ムカ)ふとせゆるなり
一 短檠土器(カハラケ)般灯蓋(ガサ)を焼(ヨ)き立為り七為焼立もく(オガ)
こしてはとの穴よりも通者ハもくと焼立へと下へ
さげる小遣(ヅ)公ハ穴の外ずらよ切たるあと下皿を
若の口よ油(アブラ)入と入置かきたてまて下皿の口に少大を
時たてて人時ハ下皿をおへ出しかきたく人大

らぬと云てへかゝりすきる也かねき立手ハびん迄
一灯籠ハ木地よする短檠ハ黒ぬりする物也
一宵ハ短檠をともし後ハ灯籠をともす子細ハ
何となき宵ハ宵ハ風なし後ハ待しける故也
一貴人ハ御まちを庭舎にて入すいちがひ庭にも
事ハ自由なるなし又ハ脇かけんもちがひこゝにこ
ゑもえげる物のきハ一つまりと亭に給路節由
一庭舎よハ路地よりふずる物也よりよれれ上り
ぞりとすまいにも庭中ハしるる
つよし凡くとがど也又ぢきにすう故に
一石燈籠ハ頃深也朝とて行る事也内路地ハ月
月の出横月をうつすてよりおく路地ハ月を見ること也
む道通の見ゆる所よくおく也
一小遠云の路地の鉢ハ長石にして亭主へ
下ちる石の見ゆる所よ相の石なき鉢なく手
のくれ門の内深き故に客ハちよしてかん
深くなりたる物也のだけと付鉢笹とならぬ
ることハ水体なる一種なたる物也
一茶道口とは同じく静なる出口にハ茶道口と大燒
ハよすりくおき心を定るるきへにつきぬる也
一主人のなる給物とハ亭中ちゑ作法ハかけ
ひざつくとするか男也主人洲浜ぬいぐるなる

うらに作附又あるまて出スゆへ、主も客人に一ツ出ぬ
也又客人よりうけぬ時ハ、それ由にて、いたゞき
いふ事ニ候也此客茶湯あるハ、く食して
とくと客人此心ニ叶と不叶と此の稽古ゟ一ツと先
師常よこと口伝

一行成又ハ貴人ゟ位と申入るハ、寒気此時ゟハ
行口ニ湯を入ていま持出よれ鉢此上よ茶又を
握よお持て出しうけさせる事になる

一今此世よ此鉢此水請此下を中ほどを置由子
ふりたる事ニうけ石躰よ多くいる事ゆへ此
為其ハ宜天此汁ハ入つてさ故湯をゆのよ

出さぬ事也もし手前行口よ湯を入てさすニもこもにニ
叶ふ事也

一数寄屋へ客入て茶此湯すこし飯るてはい
振りけへ出て札をたゞひるするては紙むし
此礼受取人ゟる行礼よ前の無用有此ハ
いう文とも無用るてハ主此方が祝なる事あ
此紙ハ大なる不調法也

一風炉先屏風(ヒマリ)ニ書子屏風也色紙(キレ)継(ツギ)又張(ハリ)交
右子細ハ床よ墨(ボク)跡(セキ)色紙等此かゝる故
也掛合て悪しきこ此為也然して屏風ニ墨
蹟するが本式也

一式正の茶の湯にハ必茶菓子ニ水菓子を出す
餅(モチ)菓子ハ脇にあしらひ脇に少茶菓子喰(クヒ)
様(やう)習ハ先よりあしらひ次に餅食し
梅水菓子を指(ユビ)にて取り食事一の習也
一水菓の式正のむき様ハごとくつぎ
ちがひにむきてすみにもむき／＼むきまくる
料理方にする一の習也
一麦ハ風炉の茶の湯の時あけるの障子(せうじ)の明
茶をたてる事も出す茶を點る事も茶
道(ドウ)口の戸をあけたる是ハ暑(アツ)き故なし
涼き事ハ涼茶をたてる也

一麦ハ風炉の時ハ躙(にじり)上りの戸を入戸たてて障子(しやうじ)を
たてる事もあり也又ハとおりにするもよし又六
びいどろぐゝるたりたるもよし
一花入を路地に飾る事に習ハ石の表を外(ワキ)の定
して飾る也又書院の中の花入ハ表を書院の
方へ向(ムケ)て飾る
一古織云の數寄屋の柱(ハシラ)也此(ココ)内にたんぽぐの
まと掛(カケ)て其上は花を立をき而して數寄屋に
此ひの花にハ花をたてして燭(キ)ハ此柱にも山鳩(バト)を
入ごろに此内にあかせ給ふ
一雪洞の紙ぐしの所古ハ後の板によせかけ

垂也小遠云ハ雪隠ハくらし砂ハ隠によるくと
アに上くれく也しし色損かよし隠ちうけ云穴枝に
初ハ行と云手足蔵あるも也
一雪隠ちり穴ハ九寸ハ円六寸杉葉入る事上ニ何し
時ハ木ハ葉を入る刀掛ハ下ハちり穴よ円長也
一小遠云ハ障子ハ数寄屋より又ハ手洗しれた
也ハ障子ハこ也刻段障子ハ下ニ上宛行付円ハ
方とちる数寄よ友ごとのたまり安き故也
一小遠云数寄屋よハつき上窓大月の上ニあり雨
書中に一ツ刀掛ハ上ニあり二段障子縁先上ニあり
ツ上口ツ也

客振

或問云伝集客振一通数く外に一座上
ハ習ある小子曰如経宗に口伝ある書
とい答
一御茶飲るとと先よくてくく支鹿菓を隠を
汚るを者よく茶に下入時何ますと守ニ身
よあまりたる事へ出る粒く也ちと世より分
らひきちる支とくあと先よってくく也
一在室かく茶とのニ中時若羽織を着く居
中にて羽織ハ胸紐をときニ戸口かこへ入
中時ハ羽織をぬぎる入口よりきあり

一亭主茶を點る時ハ脇指をぬきて大
目にきる〻へ居る〻るぐ善しとなりとよそ
見して居けるなり
一上下ハ新茶ハ茶に湯ぬる時ハ悪しく古茶めりしき上
下ときる〻ぐよし
一路地ハ氣を付よ沙よ洞きあなど付たる
上をふむも又大きよ悪し飛石の上をふむぐ善
石燈籠ハそハへ寄らざるもの也目にうる〻ぐ
よきこ又を山を請る路地にハ必手水鉢を置
づし又額など懸ハ心を付見んずし落手
ことくハ見るハあしく人にこひて見ハ

破よ八ハ茶蔵又數寄屋角柱よ茶かへ所の鉄瓶
有之の所を受くるとつき鉢なる物を又花
居るよハよく花葉の数を見でし不人同様
一或に言よ
茶入く目を付て茶を向ひ茶入をけば手に見ゆる
茶杓湯者ハ人より居るよりもく〻よ立たりたるすゞ候
上座の上座に居るを居る人ハ中座下座に置座ハさま
一中座ハ座をすまして居るは上座にづく時先中ほど居る
次座を居さるハめさる〻ハ上座に居さる〻ゆる気をすて
又下座ハ是に何にも居さるる居に後も
こなく居る役に手にて上座と下座の挨拶に成る

故に上座は志そこなひハ下座の瓶によらる
一 然して座敷につき膳に居るハ毎方へつゝく
くいきせざるやうへかさつき居るべし
一 陪食入さく手目は何人と云とも知ハかきの
数も知るまじ
一 飯は出る鴨は汁又ハ鴛は餅くしは汁
よかる時ハ合汁のさゝと夜くけ五器と取つぎ
けのまへと一口合下に置合とれいひて後ハ
よくひらと汁や餅くれハあへて是はあらざる
此饌にいる故也
一 或は客の

酒ハだくくりなきさを是(ケンカ)や(セリツ)己の酒の時ハ乱に
およびて以上に瓶をかゝる者ハよきに婦まハ多ぞ　及ぶべし
当一代をれ
物じくハなりじと口に芸に心つきてとまざると
しらるゝバ
身と寄(キ)麗(レイ)なき経を清くなかるべし
茶は湯の辰の深くなれ　同じ
物事は目にたいたるハ行きぞや上手(セウズ)と経(イフ)ハ都と言さるべし
九盤よ人の出ハ作ハやりくわり
すなとるまじ 静ハなどもあきとの
一 茶菓子食てハ汁に残しすこぐるしき
きなこはたくまでと 椀皮に付居へし

一茶碗よのミ口といふ法を付る事ハ秘心の人の
まざく茶碗の如(ナリ)く作くのミ口六ケ敷故口傳
一濃(コイ)茶とのむに上たは中たは茶碗とて入ハ尻居
事ゆたしハすこしつゝしみ候ハ茶れ多く
と礼せんが為也
一ちんよそへ尻乗時ハふかいまを不穢(フキケン)姫の文ハ一吾事
し清きへ立ずれバ雨もとふく見へして置
ゆゑくらし露地先手に引ちらかしんぞうにせをる
手数よ大によろしつけ給り
一自然行事と節ハいくつけるぞと数へ取(カヘ)し
人にわけ見る問物なるを

一雪(セツ)隠(チン)ハたとへ共用路地よりけるハむさと八居ざる
おとなる事に雪隠ハ新敷たりけるおし又持込(ウヘゴミ)中
よこのかやぬき其雪隠ハ荘置ておもへかる事也
一座舎の付たんけいハしかるべくしめ客此れにてのふ
事なしものなしと見る事ハ手燭をもて見る
一刀掛(カケ)此下脇(ハキ)石に手燭(シヨク)置事なり此時ハ客数
有所へ指くゝ入れて置
一茶入茶碗共拙のうちハ何すくなきくるしかるへき事
なし自然見に来ることあらバ大なるふしけな
一中立よりまた露地へ出る時風吹なるむしや
やうき時ハ手水の水かげをごうにすゝほとやく

うけわくこと

一 中立より掛うけへ出る時掛うけの角(スミ)に座(エンザ)付を
上座の方へむきて我居る所より上へいざりこ
くとろくよつるこ掛をうけくつるハ無礼(ブレイ)なる

一 右之客座を中座下座の人(ナラ)まさるくまで同じことも
時ハ客座にても付いそぎて上るもの

一 主人の給仕の時ハ主人へ掛うけへ上るとかくる時ハ我
ハ下に居るもの上り一帝と御亭の時ハ我ハ客位
のようにくとはくびいてゆるがよし

一 立炭を好(コノミ)むくて付るまでる時ハ釜の出るまでの
つきたる時り出(イトヽ)とハ云ふまでのかきまで云ふ所(?)

一 先師常に咄ゆハ小遠云ハ何(イヅ)ごくしも立炭を
あこに好(コノ)まさること云由ハ多く濃(コイ)茶まへ茶
入を夜入を後炭を能々見て釜上浮を
つ浮さぬる于茶ハいけずく、して其後揃付
多く人和尚ハ済んきハ多く亀けを居けり
住宅人とある表も四相く置(キセ)と申けり

一 先師常に申イハ茶入なるし香炉(カウバコ)なるしも
外何れ品具なるしある物に目利(メキヽ)たくをとして何
れなる云ハ大さ要なこと又老人など目(ガン)鏡とかけ
はみハ何りぎるへよるすちなるひ(グ)こそなり
子細ハ茶入ひし香合なるしきびをとてなひ

宝文まく行る文之手を見出してもてうつき
すせていまもきをやがるゆゑ手故我吾不
ま下よらくと名をくひぢを手につけけり
のりへむきくみるし水茶入れるんいまぶて
おとのお能をせするがすし此たしおき之比心
む返理に叶ふ也
一 棗を無上にむ儀と乙也む亭主此段具をと
八亭主へ対して何いさ無き我安き
どこす布(カツ)る害ありに、ろうぎ故に見たてる
ちき無く時八とる至ぐ如く無くハ利休来に
ろうけ又付代(サイ)地を向と宮へ八いのし ちき也

視だ様にして無し一つの如きと云ふ手を茶扱ひして
手後水指の蓋をする時乙一し
一 天目まをまむ手数る茶をたてる時八手をる
を中次す切ぐしも上を帳巾ゐる手 明(トウ)ハ八手迄
行くたるまくしむ一子細八茶をすぎさり
又八一文字に入む故何くれ行く人バくぎるこし
手故にきるして如くのとし
一 茶入之儀をこなた八先八あき茶之子細八新(アタラシキ)切
あどをとりて室生する事也古きも見
たてる茶入あど有る時八儀も後々置け八
儀をこ也手故茶入又こ出し候はば儀をこし口伝

一絵讃のかけある床に生る時ハ花に大事有
いけまじけれバ緒尾に風帯中一文字を見て
其絵を見て後讃を見る之子細ハ讃ハ絵ニ
依てする故之口伝

一茶の湯者ハ香を行ふへし式之経懐中すべし
香ハ茶の湯に相ハ茶入を入ル故にまぎんぎんし
たしなむへし

一紫帛巾とふひ中すべし香人のため入也
又ハ始めくさの入時とざしハ支度とかくたしなみ行べ
又何色ならひ其持へし茶の湯にハ唐木綿
其をねぐひぐ綿之布ハ事はひらける故也

床飾并花

或問古事の由来ハいかなりやむ振の名の聞
床荘生花三伝集一帖上之習なるや其花
答口伝深し先書に茶花の事を雖
書仕残ぐりける止又問花ハ多く花生
のかまりに依花生根に取るや答花生
の器に依て皆ちがひある故に十七帖の習
尚又是なさとり給へ

一或問世になげ入と称するハ花のことや答世
になげ入の色花のことく称ハ花の性を和
人の親なるすることハまことに是ひ給へ根本を

抛入ハ正花(セウクワ)の心を生花(イケハナ)にうつする物なり　立花ハ花を生(セウ)じ
たる事の形(カタチ)也　故に生花(イケハナ)と云ふ　立花師の
方にかげ入のうらこころのと云　本生花(モトイケハナ)ハ立花師の
するわざにて子細ハ立花ハ花瓶砂に物と
ひとつさきハまろまり七つの枝をたつる形(カタチ)きハまりたる物
あるまじ　生花(イケハナ)ハ左(サ)ハ何ぞ枝ことさら　さまハよろしくする大
小よし　花瓶(キヘイ)山辺(ヘン)水辺野辺生(セウ)ずる形(カタチ)をお
もしろく生かへすを第一とす　花しかたくの指ら
花生ハ山辺水辺もしくの遠近をこしらへ
生るなり　抛入のうらこころと云ハ茶の
湯にハ数奇者の皆茶事とある心也

一　主人花を入置る飾花のうけ様ハたゝ人ハ右の方に主人
かけ花の時ハ左のはより床へ一度も込(コム)也　何時も主
人の心に合方を受(ウケ)く床へ入てよし
一　三つ釘ハ高き釘かりの上の方へする中の釘
かけ花の方下へするを秘事也
一　床に壺を飾り荘る時ハ表中壺袖先(シクサキ)に
清香(セイカウ)を飾(カザ)る　右に壺ひきれ時ハ清香を
中(ニ)真壺(ツボ)袖ほうきに飾(カザ)る
一　或日信長公御床に初て三ケ月の壺を茶
会に信長御書院に花を生させ度よし
仰ありて三入まうしの花を知らせよと上之ハ

伝ニ云御嗜悦不斜然ニ合ト以ス
一 主人此御返ニ壺を添る又ハ人々に兼て
法などを花たる事ニ而時立寄がくれ大
事にして膝を床のおもつき掬かくべし
一 或曰前花行ニ付ハ賞花此御道ニ行る時紙紋
紙を賞花此方ニ口切よりへ添ふ座敷を
座大なる口此花生ニ水を一とつ入花ハかし
紙紋の紙を人々によろしく賞花我を花に前
たりと深くかんじ入る也
一 京賞花後出此出まで茶を下ゆ小壺を盆
に茶く座敷ニ而手時流茶一とつくり入

くど座保人ニ賞花大事此小壺を以座ニ上ゲ
く入る事とうちて時座より観を如く六
ヶ座敷へ入し也ある人ハかゝる心がけの第也
一 御成此時座よりけんをかゝるに糸をと云
如く風吹かとの時を吹上る事ある故
ある時によりをつけ白き糸を下一文字ト中
に花生をとらるこめ無すゑハ風吹ましめきおき
事なしと伝
一 花を生るに元三日ニハ梅上巳ニハ桃 端午ニハ
せうぶのすゝきなせうぶを立言にハ入る七夕
ニハ蓮重陽ニハ菊を生る色黄菊の類

一かねて花入露の付様小遠云のなかたる云
花生桶と云を掛けるき湯をへらけせ
中へ花生入置ことに露付まおきれ出し花を生
刻まれ床へ上るすべ露まゆる愚癖(ヲモヘラク)の
花生を水をけくよせぞ絶ぬぐひ花を
一の生と思ふ時井から水をくミ上水をへえ同か
おれぞうり汗(アセ)出て露出るといへ共りまぐと露
のまゆる支なく露を拵也
一或日鈎舎に婿(ハニメ)花をへ茶此時茶壺(ツボ)文飾(カザル)文。
め所床の間にさりけれバ加之
一或日花よきしくびとも云所もたくくとそう[illegible]リ

一方とを上に此花とくまくすども加する様に生る
一或日水仙早梅(ハヤ)茶山(サン)花椿は同じあまく未あそ
ぶらふく[illegible]せ安思へバ桶よりけくむろに入さい
くめとを所由也ハなく用也
一或云
庭よりる花とはたの床に生ぬるもで全の所なき也
まくわく花と葉の数よく見へちへ何ハ色をかまよ
床へ向ひ揃へらるこそ見ゆ也添く向ひて他由てよ
一手本此道庭(テイ)をいろと梅と二色へ入まして字珠付
ありかたるとていま〜同し也を除さる人へ紀鶴
に従らまして立花の花ハ三所もて流るると也

一 立花古今時ゟ今床に花生る事古ハ作出ハ殿
於客前へ入るゝも苦しからず自然なる花を入る
すゝきハ先九月へ面(ヲモ)てをひだまり勢ニ居る
或人物語也
一 生花ハ寸一に中枝(ナカエ)をもととする流よ多ひとし
と花のつり合を生(イケ)る事大事也心ハ二王此た
ちすきのまし花ハ小ニ生るハ下よしかるき
花瓶に生る事ゟ切者のうちぎさ也
一 葭ハきかとたる根をたき酒よ根をつけ大きな
中きくらきたてよふくつけくさいくみとる
花ひしきとおもしろけかわる物也又花

生花中へしかるを酒をかくたるりぐすし
一 芭蕉万葉河骨(カウホネ)沢桔梗など此水草をきる事ハ
まり系し根をつきそ此下を切べし出とすへて
よくいける物なり
一 仙翁(センヲウ)花がんひ姫しゞらなど切口を焼き節し
をたちきりたるが水を上る也花ハ水をか
らる事ニ付きせ
一 花に輪落(ヨウテ)そうある花ニハ楊枝此先ゟ焼を
輪きハに付へし然共ハ一ニ上法花不上法也
一 何る時コデ去ル切者なる人と信(ゴ)人此方へ茶を掃
に住(コキ)なるてハ毛能きのつまりに花を右此に

よ子のよそ節子此月あるからなきれ此積を
全るよ其性なしらく生をかね席を
て中立よ出はなる失念也花を成支をあ
世ぞしてそれよ立ずし残れ花をなく
それに立ぬあまの浄中入として花を花は掃
手へ取入繕ひ中とりけ其後日に亭主へ亭
部ともつて是を伝授せしも也して其費なる時
分ハ手段を繕揃をかくべきせへのせる
花をそれに私し其も我出る花を残り
置に大きなる誤也

一 不時にふて人往時ふつは花を生けている所へ

一 往支ありてつは日ねくよきて所へ参生先頼より
花を仕兄中人ふに段様に二宝年人奉楽支
よんでる也中歴一かと視て勝しのゝ支りるも
手付幸能ゝ又へまかりなまゐ悲く勝ては
のゝ花見れは往我由視へ成亭主是悲一ふお
と視すてへのくそこにしても花をする仕
様ハてつはと談合をなりよするが習也

一 或会の 花入りはいけるる花ハ見んとうけ
之法ましきことけハとそれるなり

一 座に膳あらけ燭揃に立に茶への世かなる支
ふと長ぎ下口は中立後水路へ付て会合すること

一小とこ〳〵が二幅對かゝる時ハ花出るに定 サ又二対
て常の事也
一法(ホツ)とを身めりけのくぎみうけ掛のあしらひに遊
花入をも花を生る中ちもてらわれ不為
なからる事也
一定る八花ハ生ぬ法也 書花柾よりも生る事
何れも 此付八景花の外り作花前後也
一或の 廿ち花ぢろかゝる事 せんせん花
せんせいへらきをしきらひとそ 十也